

研究・調査報告書

報告書番号	担当
356	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名（原題／訳）	
Opportunities for the primary prevention of colorectal cancer in the United States. アメリカにおける大腸がんの一次予防の可能性について	
執筆者	
Joshu CE, Parmigiani G, Colditz GA, Platz EA	
掲載誌（番号又は発行年月日）	
Cancer Prev Res (Phila). 2012 Jan;5(1):138-45.	
キーワード	
大腸がん、一次予防、リスクファクター、生活様式、アメリカ	
要 旨	
<p>目的： いくつかの研究で、スクリーニング単独より生活様式の改善を加えた方が大腸がんの減少効果があると報告されている。大腸がんの一次予防の可能性を確かめるために、アメリカにおける改善が可能な生活様式がどの程度であるか調査した。</p> <p>方法： アメリカを代表する横断研究である5つのNHANES(1999-2000, n=2,753; 2001-2002, n=3,169; 2003-2004, n=2,872; 2005-2006, n=2,993; 2007-2008, n=3,438)を用いた。World Cancer Research Fundで大腸がんの確実な原因とされている5つの要因（肥満、運動不足、赤身肉、加工肉、飲酒）、Surgeon Generalが可能性があるとする喫煙を評価した。それぞれのリスクファクターを分類・結合し、全体として、性、人種、年齢、年ごとにまとめた。</p> <p>結果： 2007-2008年では20-69歳の成人81%が少なくとも1つの改善可能な習慣を持っていた。50歳未満では15%以上の者が3つ以上のリスクファクターを持っていた。1999年と2008年でリスクファクターの保有割合は変化がなかった。これらの大腸がんのリスクファクターは目新しいものではなく、他の慢性疾患のリスクファクターと同じである。</p> <p>結論： これらの知見は予防政策に寄与するものである。大腸がんや他の慢性疾患の原因となる生活要因の意識を高めることで、特に若年成人で、生活様式を変えさせるかもしれないし、スクリーニングガイドラインの遵守につながるかもしれない。スクリーニングと生活様式の改善を相互に組み合わせることで、効果的に大腸がんを減らすことができるだろう。</p>	